

分配(シェアリング)に関する 海外研究動向

人類学では個人間や集団間でのモノな どのやりとりを「贈与」や「交換」、「互酬 性」、「再分配」といった概念で理解するこ とが多く、「分配」という概念を使うこと は少ない。一方、一部の人類学者は狩猟採 集民の獲物の分かち合いや、一方から他方 に獲物の一部を与えることを分配とよび、 彼らがいかなる状況で、いかに分配するの か、その文化的・社会的・政治的・経済的 な意義の解明を試みてきた。

狩猟採集民に限らず、人びとは日常生 活において、さまざまなモノを分配してい るが、その中でも食物の分配はすべての社 会で共通して見られる生活の基盤となる実 践である。

ここでは、最近の食物分配に関する海 外の研究動向について紹介したい。

霊長類学的研究

食物分配を研究対象とする分野としては、 おもに霊長類学や進化生態学、文化人類学 などがあげられる。霊長類学と進化生態学 は重複する部分もあるが、近年、興味深い 成果をあげている。

食物分配はヒト以外の霊長類など広く 動物界全般に見られるが、ヒトとそれ以外 の動物には歴然とした違いがある。たとえ ば、チンパンジーなどの場合、成人個体の 間では、一方が他方に要求してはじめて食 物の移動が発生する「乞う分配」であり、 自発的に与えることはほとんど見られな い。ヒトは自発的な分配や交換を行うこと

ができるほぼ唯一の生物である。

ヤーギとファン・シャイックは 68 種類 の霊長類について食物分配の有無の比較研 究を行い、霊長類では血縁者間の食物分 配が基盤となり、その後血縁関係のない 成人個体間に広がっていったという進化 の可能性を明らかにした (Jaeggi and van Schaick 2011)。

現時点では霊長類の食物分配を説明す る仮説として、食物の所有者が他の個体か ら執拗に食物を要求され続けることを避け るために、嫌々ながら一部を手放し、分け 与えるというハラスメント仮説と、食物の 所有者は短期的には損をするが、お返しな どを通して長期的には利益になるために分 け与えるという互恵性仮説の2説が有力で

進化生態学的研究

進化生態学では人類の食物分配をヒト の進化の結果として説明しようとする。こ の分野では偏差減少仮説、血縁淘汰仮説、 互恵性仮説、ハラスメント仮説、自己誇示 仮説などが提起され、事例として南米の狩 猟採集民アチェなどの食物分配を検証して きた。しかし、理論から演繹された仮説と 事例との間に齟齬が見られ、どの仮説にも 一長一短がある。最近では、複数の仮説を 組み合わせて説明する傾向が見られる。

この分野の研究拠点は米国のユタ大学 やニューメキシコ大学、ミシガン大学、英 国のロンドン大学である。最近では、カル

> フォルニア大学サンタバーバ ラ校のマイケル・ガーヴェン (Michael Gurven) による互恵 性の発生に関する研究が注目 を浴びている。

文化人類学的研究

グローバル化が急激に進行 する現在、世界各地の狩猟採 集活動は衰退傾向にある。そ の一方で、北アメリカ極北地 域やオーストラリア北部地 域、アフリカのカラハリ地域 などでは食物分配は根強く実 践され続けている。

近年、南アフリカの狩猟採集民を研究 しているトマス・ウィドロック (Thomas Widlok 2014) が、興味深い研究を発表し ている。彼は、分配とは「価値あるものを 他者がとることを容認すること」であると いう新たな定義を提案した。そして彼は分 配行為を、(1) 与え手と貰い手の間の社 会的関係、(2) 両者間の会話の様態、(3) 両者がその場にいることという3つの要 素によって説明できると指摘している。ま た、分配は人類が発明した制度のひとつで あり、「交換」や「再分配」などと同じく 人類学の中心概念に加えるべきだと主張し ている。さらに、価値の人類学的研究にお いて自明とされてきた道徳的価値の多元性 と経済的価値の一元性という前提の妥当性 にも疑問を投げかけている。

以上、分配をめぐる研究動向を見てき たが、筆者は狩猟採集社会における食物分 配の実践や制度の解明は、狩猟採集社会の みならず人間社会とは何か、ひいては人間 を理解する上で重要なテーマであると考え る。今後は、地域や時代を超えた通文化・ 通時間的研究が必要である。2016年9月 にはケンブリッジ大学マクドナルド考古学 研究所で分配をテーマとしたシンポジウム が開催される。どのような成果が生み出さ れるか楽しみである。

【参考文献】

Jaeggi, A. V. and C. P. van Schaick 2011 The Evolution of Food Sharing in Primates. Behavioral Ecology and Sociobiology 65: 2125-2140.

岸上伸啓編 2016 『贈与論再考――人間はなぜ他 者に与えるのか』臨川書店。

Widlok, Thomas 2013 Sharing: Allowing Others to Take What Is Valued. HAU: Journal of Ethnographic Theory 3(2): 11-31.

文·写真 岸上伸啓

国立民族学博物館研究戦略センター教授。 専門は文化人類学、北方文化研究。著書に 『クジラとともに生きる――アラスカ先住民 の現在』(臨川書店 2014年)や『カナダ・ イヌイットの食文化と社会変化』(世界思 想社 2007年)、編著書に『捕鯨の文化人類 学』(成山堂書店 2012年) などがある。



イヌイットのハンターによるアザラシ肉の分配(カナダケベック州アク リヴィク村近辺、1999年10月)。